

清坊と三吉（せいぼうとさんきち）

吉田絃二郎

【解説】

よしだげんじろう

作者・吉田絃二郎は、1886（明治19）年に佐賀県に生まれまし
た。早稲田大学教授をつとめながら、多くの小説や随筆を残しました。
1956（昭和31）年に亡くなりました。

【清坊と三吉】

あ みずうみ ちか たか やまでら
或る湖に近く高い山寺がありました。その山寺の鐘は、
しちりしほう きこ うわさ
七里四方も聴えると噂されていました。

せいぼう
清坊は、その山寺の鐘楼守のお爺さんのたった一人の孫でありまし
とつ か
た。清坊のお父つあんも、おっ母さんも、清坊が生れて間もなく死にま
ひとり じい
したので清坊は世界にお爺さん一人を頼りにして成長しました。
ひとり たよ
せいちょう

せいぼう あさ ばん
清坊は朝も晩も、お爺さんが撞く鐘の声を聴いては、大きくなって来たのでした。

ぼく
「僕もいまに大きくなったら、お爺さんのように撞いてやるぞ！」
しょうろう した
清坊は鐘楼の下から、鐘を撞いているお爺さんを見上げては、そう思うのでした。

けれどもお爺さんは、なかなか清坊に鐘を撞かせませんでした、

「ねえ、お爺さん、僕にも鐘を撞かせて下さい」
ぼく
いちにち いくど
と清坊は一日に幾度もねだるのでした。

「ばかを言わっしやい、お前はまだ小さいから撞けない。鐘の数一つ撞きそこねても大変なんだから喃！」と言って、お爺さんは少しも鐘をつかせてくれませんでした。

せいぼう やつ

清坊が八つになった年の春でした。冬の寒い間を、夜遅く起きて鐘

さむ あいだ よるおそ

を撞いたせいとか、お爺さんはこのころになって骨の節々が痛んで、鐘楼

かいだん のぼ お

なんぎ

の階段を昇り降りするのさえ、たいへん難儀なように思われました。

「お爺さん、今度は僕に鐘をつかしておくれ！」清坊はお爺さんのい

たいたい風を見ているにしのびないでそう言いました。

ふう

お爺さんは、はじめのほどは、何うしても聴きいれてくれませんでし

ど き

たが、おしまいには自分の足腰が立たなくなったので、やっと清坊に鐘

あしこし

を撞くことをゆるしてくれました。

せいぼう

やまでら おしろう

清坊がはじめて鐘を撞くのだからと言って、山寺の和尚さまは、清坊

ころも いちまいこしら

に小さな黒い法衣を一枚拵えてくれました。

え

しょうろう

あが

おしろう

ほとけ

まえ

すわ

「宜えかな、鐘楼に上る時は、和尚さまが仏さまの前にお坐りなさ

こころもち い

しゅもく

にぎ

るような心持で行くのだよ。撞木を握って鐘の前に立った時は、自分

の心をお月さまのように清くきよして撞くのだよ。心が曇くもれば、鐘の音ねまで曇くもって来る……」

お爺さんはそう言いって、清坊を鐘楼しょうろうに上あらせてやりました。

清坊はその日の真夜中まよなかの鐘を、はじめせいぼうて撞くのでころもした。

清坊は和尚さまにいたしょうろうだいた黒い法衣かいだんを着て、鐘楼の階段のぼを昇のぼって

行いきました。かすかな月の光のなかに、花が白く咲さいているのが見えまさした。高いお山のお寺なので、夜はまだなかなか寒くありまさした。清坊はお爺さんに教えられた通りに自分の心を清めて、鐘の前に立ちまさした。

満身まんしんの力をこめて、鐘かねを撞つきまつした。

ゴーン……ゴーン……ゴーン……ゴーン……

鐘かねの声は夜の空しずを静みずうみかに湖うみの上につたわって行いきました。

せいぼう こころ きよ しょうろう かね つ みずうみ うえ
 清坊が心を清めて、鐘楼で鐘を撞いている時でした。湖の上を、
 いっそう ふね きし とお はな おき おき へだた
 一艘の船が岸から遠く離れて、沖へ沖へと隔って行きました。その船
 のうか さんきち わかもの
 の上には、湖の岸の農家に生まれた三吉という若者が乗っていました。
 としよ ははおや まず く
 若者は年寄ったただ一人の母親と、貧しく暮らしていたのですが、
 いなか いく はたら かねも
 田舎では幾ら働いてもお金持ちになれませんでしたので、今夜おっ母
 す むこ ぎし こうざん に い
 さんを捨てて、こっそり湖をわたって向う岸の鉾山に逃げて行くつもり
 だったのです。

さんきち こ ふ
 三吉は船を漕ぎ出しては、振りかえって岸の方を見ました。何も知ら
 ないで眠っているたった一人のおっ母さんの家の窓からは、小さな燈が
 ちが い も
 ちらちらと、戸外へ洩れていました。

ひ ふ
 三吉は、そのかすかな燈を振りかえって見ては泣きました。それでも
 船をぐんぐん沖の方へ漕いで行きました。

湖の上には霧きりがかかって、間まもなくおつ母かさんの家の窓の燈ひも見えなくなりました。

三吉はやつと思ひ切つて、沖へ沖へと船を漕こぎました。

一里ばかりも船を漕こいでからでした。

ゴーン・・・・・ゴーン・・・・・ゴーン・・・・・と清坊せいぼうが撞ついて
いるお山の寺の鐘が、湖の上を静かにひびいて来ました。

三吉さんきちは昨夜までおつ母かさんと二人ふたりつきりで、炉ろの火を焚たきながら、鐘かねの声を聴きいていたことを思ひ出しました。

おつ母かさんが今夜はただ一人で、あの鐘の声を聴きいていなさるかも知れぬと思うと、何どうしても帰らないでは居いられないようになりました。

それでも三吉は「おつ母さんは、今日は麦畑むぎばたけで働はたらいて疲れておいでだったから、きつと眠ねっていて、鐘かねの声なんかお知りにならないも知れないッ！」と思ひ直して、また船を沖の方へ漕こぎ出しました。

ゴーン・・・・ゴーン・・・・ゴーン・・・・

と、清坊せいぼうが撞ついている鐘かねの音ねが、再び湖の上に聞こえてまいりました。

「おつ母かさんが眼めをさまして、私が居ないので、あの鐘かねの声こゑを聴ききながら、何どんなに泣ないていらっしやるか知れない。」

三吉はそう思おもって、船を漕こぐ手をちよつと止めました。

けれども直すぐ「おつ母さんは疲つかれて眠ねっていらっしやるにちがいない・・・・」と思おもい直すして、三吉はまた船を沖の方へ漕こぎました。

ゴーン・・・・ゴーン・・・・ゴーン・・・・

清坊が撞つく鐘かねの声こゑが三度、湖の上を静かにひびいて来きました。

「やっぱり駄だ目めだ、あんなに鐘かねが鳴なるんだもの、おつ母かさんは眼めをさまして見て、私わたしがいないので泣ないていらっしやるにちがいない・・・・」

三吉はそう思いました。そしておっ母さんのことを思って泣きました。何うしてもおっ母さんを捨てて、旅に逃げて行くことはできなくなりました。

三吉は船をぐるりと廻してしまつて、一生懸命に岸の方へ船を漕ぎもどしました。霧のなかからおっ母さんの家の窓の燈が、だんだん明るく、大きくなって、近よつて来ました。三吉は岸に飛び上がつて、おっ母さんの家に帰って行きました。おっ母さんは眠りもしないで、炉の火を焚いて三吉の帰つて来るのを待っていました。

「おっ母さん！堪忍して下さい。」

三吉は土間から飛んで行つて、おっ母さんの胸にすがりついて泣きました。おっ母さんは何にも言わないで、優しく三吉の背を撫でてやりました。

ゴーン・・・・・・・・ゴーン・・・・・・・・ゴーン・・・・・・・・

清坊はしばらく鐘をついて、鐘楼しやうろうから降りて、お爺さんのところに
行きました。

お爺さんは寝ねないで、炉ろのなかに焚火たきびをしながら、清坊を待っていました。

「おう、善よく撞つけた。たいへん善ねい音ひびに響ひびいた。寒さむかっただろう喃のう！」
と言ってお爺さんは冷たくなった清坊の手を「ごしごしとこすってください
ました。」

清坊は幸福こうふくに輝かがやいた顔をして、お爺さんといっしょに眠ねむりました。

【参考テキスト】

・『児童文学名作全集 2』（福武文庫）